随想

史談会発足二十周年記念祝賀行事に寄せて

東京都　御手洗一而

○変遷を知る

私は地域別の歴史問題を懇会する場合、先ず、各地方の歴史研究団体の有無を確かめ、不明の時は、其の地の教育委員会に問い合わせてお世話になることにしている。その方法として、手っ取り早く電話をする時もあれば、手紙の時もある。しかし現在は、三冊の本が手許におかれて、私を助けてくれる。

全国の学者や研究者が利用するその本とは、日本歴史学会編（吉川弘文館刊行）の「地方史研究の現状」である。大分県の項は渡辺博士が担当され、「佐伯史談会」と個人の部では、疋田泉・羽柴弘・小野英治の各氏が紹介されている。

昭和四十四年九月の刊行のため、その紹介文の中に、「四月で三九号に達した」とあり、三九号の時代に思いをはせている時、ちょうど、発足二十周年記念集会のパンフレットと記念品が手許に届いた。懇切ていねいに要領よくまとめられた二十年の足跡を、一字ももらすまいと文字を追いながら、改めて詳細に史談会発展の変遷を知ることが出来た。

そして前記の紹介文から他の市町村の史談会を一覧して、機関誌の一つを例にとっても、わが「佐伯史談」ほど着実な急成長はないのではないかと鼻が高くなった。

先達に感謝しながら、現在、私はその一員であることに誇りをもっている。

「佐伯の郷土史を調べるのなら、まず『佐伯史談』を……と勧めて、その人を失望させることはないだろう。」

これは先号の高木会長の巻頭言である。

くどくどと説明は要らない。「佐伯史談とは何か」の答を言い得て妙である。その変遷を知り、二十周年を祝うと共に、後輩として、先達・先学の労苦に改めて深く感謝して、お礼を申し上げたい。

○歩き、動く文化尖兵

「佐伯史談」が送られてくるたびに、会員の町や野や山を歩く足音が、東京まで響いてくる気がしてならない。踏査あり探訪あり、いつも羨ましく思っている。しかし、忘れてならない事が一つある。史談会発足当時は、郷土の歴史や文化遺産の継承に理解や興味のない人々には、「何をやっているか」ぐらいのことであったと思う。文字で表わせば「幾多の労苦」であるが、先達や諸先生方にとっては、現在のような環境ではなかったと思う。必ずや冷たい眼で見られ、あしらわれた時代のあったことを、この際とくに強調しておきたい。

私にも、これに似た苦い経験があるからである。

かって私が、瀬戸内の御手洗島を訪れた時、中世の墓地らしい所在が分らないまま、町から二里程離れたある部落の後背にそびえる山中に、一基の五輪塔墓があることを聞き、同地の教育長から自転車をお借りして出掛けた。みかん山に開拓された山の中腹に、荒廃した小さな

祠と、形の整った中型の一基の宝篋印塔があった。平家の落武者の墓と聞き、傍らに室町中期の伊予海賊衆の五輪塔墓も幾つか数えられた。

山の沢を分けて、人目のつかない谷間の陰は、日の当たらぬ暗い場所であった。そこに近づくにつれて、私は何者にか襲われるような、反面引きつけられるような恐怖を感じたことを、今でもはっきり覚えている。

私は、幾度も手を合わせて山を下り、みかん畠に近く、土地の所有者らしい一人の老人に出会って話を聞いた。老人は、みかんの景気が悪く、若者も皆島から出て行って困っていると長々と話した。そして、宝篋印塔については、

「前に一度広島大学の先生が見えたが、そんなことを調べて、一体いくらもうかるのか」

と聞かれたのには、唖然として返す言葉もなかった。その上、老人は埋葬品を目当てに、その墓を盗掘したらしい。

「大きな人ではなかったらしいが、二体がうずくまるよう並べて葬られていた。」

と、平然としていた。

今では供養もしているらしいが、

「あの埋葬者は、この部落の、あなたたちの祖先かもしれないよ」

と、私はせめてもの皮肉をこめて告げ、老人が変な顔をしたのを覚えている。

そして、真夏の日光の直射を浴びて、自転車を走らせる汗をふきながら、手向けの線香一束をも忘れた自分を恥じながら、勉強の本物でないことを悟ったことがある。

こんないやな思い出があるかと思えば、感動で眼頭の熱くなった時がある。

一昨年であったか、下浦を探訪した折、羽柴先生にお願いして畑野浦を訪れた時のことである。富沢会長が率先して三十人近い老人達が、江戸岬に公園をつくっていた。

私はこの光景を見て、

「ここの子供たちは、いい先輩をもって仕合わせだな」

と直感した。

昼休みに、お握りのご馳走も忘れられない思い出になったが、私は、五万分の一の地図をひろげて、老人達に山越えの経験談と教わった。(昔の畑野浦峠越しの話)また史談会の研修旅行の話が出たり、その広範囲の足跡を頼もしく感じた時である。

富馬会員が言った。

「先生(羽柴先生)はよく動くからなあ。佐伯史談会は歩く史談会だ。」

「ほうー、移動史談会ですか。」

私はそう受け応えたが、この言葉は今でも忘れられない言葉になっている。そして、ハマユウの最盛期に、二度も三度も訪れたいと思い、作業する人々の手足の動きを追いながら、

「ここに歴史がある。」

と、眼の前に「歴史」を認識し、

「今、眼の前で歴史が造られている」

という感動を覚えた。

私自身、歴史の勉強を通して、過去の知識を整理し、空白を埋めるのに汲々とするあまり、当初「佐伯史談」も歴史事実の整理、あるいは一つの方便としか頭になかったが、この時初めて、お年寄りに、「歴史や文化を造

る」無言の教訓を教わった。

これこそ文化の尖兵である。自らで造り、自分の眼で確かめ、その土地を自分の足で踏み、この一体となった歩き動く史談会、これこそ文化の尖兵「佐伯史談会」の姿である。

○ 私と機関誌

歩き動く文化の尖兵として、諸部（かたりべ）の役割を果たす史談会から、私は歴史の息吹きを学び、文字になった機関誌から、現実の知識を供給される。数百ページに及ぶ専門書から期待を裏切られることもあれば、小冊子からヒントを得ることもある。概して必要個所は数冊の本の中の一行間にすぎないことがままある。

その点、「佐伯史談」は私の宝物である。三十数ページのわずかな行間の中に、必ず数個所の赤線がひかれている。郷土史の機関誌であればこそ当然のことであるが、反面、そのために原稿用紙の十枚や二十枚を無駄にすることはままである。一番ひどい時は、数百枚の脱稿を一つの歴史事実の不認識からふいにした時である。これにはがっかりしながら、その意味では「佐伯史談」の偉さも十分知っているつもりでいる。

はじめて私が会員としてご縁きいただいた時、「矢野龍渓翁の上京記」を書いた。この資料は、史談紙上に未発表であろうとの推測であったが、このような心配や、史実に対して誤った解釈ではないかという不安は、いつも持っている。

その頃私は、藤田茂吉（鳴鶴）に夢中であった。龍渓・鳴鶴・鶴谷の友情と、明治青年の在り方を探究して書きたかった。現在、国会図書館で郵便報知社の社説を拾うため、遅々として進まず、六百枚位でストップしているが、その裏には、「史談」に、いつ何が出てくるかも知れないという、興味と怖さがいつも同居している。五年の間、まだその入りしかない。いざとなると、維新から明治初期にかけて、随想・論評の少ないのに気がつく。この時代は、現在諸先生方にあたる先代の時代である。産業革命の変革・佐伯を去る旅の仕方、物価指数等、何一つ私には知識がない。

米が一升いくらとか、床屋がいくら、履物が一足いくらとか、かいもく分らない。近々百年前のことでありながら、中世・近世はどの概要もつかめないでいる。これらの願望は、私の独りよがりかもしれないが、手近に資料が埋もれているような気がしてならない。そして、各時代研究班の設置も、これからの進み方だと期待している。

新知識と得る感激と誤認を知らされる恐怖、天女の使と台風の眼となる機関誌の話が、感想や願望やら、変な方向に脱線してしまったが、私は史談への取り組み方について、もう一つの不安にかられている。

それは書き方についてである。

学術誌には学術誌なりの論文の書き方があり、出典・註書の煩雑は読み難くなり、だからといってあまりくだけ過ぎると「史談」でなくなる。私は迷いに迷ったあげく、その中間をとることにした。そのかわり、字句や行間の史実に関しては、その出典の責任をとれるようにしている。しかし、話体で書こうとすると、文章が冗長になり、不思議に原稿をきる羽柴先生のご苦労が頭に浮かび、消しては簡潔に漢字を連ね、堅すぎるかなと反省す

る。第一には、先学の「佐伯史談」によせる権威を損ねたくないし、かといって、書く以上は読んでもらいたい希望もある。その錯綜（さくそう。いりまじること）の中に、変な不統一な文体が現れることもあるが、こんなのが一人ぐらいいてもいいわいと、ひとり合点（がてん）している。

こんな考え方自体、私と機関誌ではなくて、すでに私の機関誌である証拠であろう。

二十周年記念日を迎えて、牛歩のような堅実な重い足取りの中に、物故された先達・諸先生方が私たち後輩に、「佐伯史論会」の伝統の基礎を築いてくれた。心から敬意を表し、共にお祝いさせていただこう。そして更に発展を誓い、祈り、感激と共にこのペンをおく次第である。

（おわり）

随想

神話の里を訪ねて

本会会長　髙木　士吉

四月十五、十六の両日に行った南九州見学の旅は、多大の成果を収めて無事に終了した。霧島神宮・鵜戸神宮を中心とする神話の里を訪ねることも、一つの目的であったので、これについて少し書いて見たい。

日本神話は、古事記・日本書紀の神代の巻に収められたものである。天地の創造にはじまって、高天原（たかまがはら）の世界が開け、天孫瓊々杵尊の降臨へと続く。

その降臨の地高千穂については、県北の高千穂町と、小林市の高千穂が本家を争っているが、何れが本家と解決のつく問題ではない。悠久の昔の神話の世界のことである。

私は霧島の地を訪れたのは今回が初めてであるが、壮大な霧島神宮に詣で、秀麗な高千穂の峯を仰いで、低回顧望、神話の里に遊ぶ喜びを味わった。

瓊々杵尊は霧島神宮に祀られて、人々に尊信されている。ここで天孫降臨について少し考察して見たい。

高天原で天照大神の祝福をうけ、皇位の象徴の三種の神器を持ち、天の八重たなびく雲を押しわけ、高千穂の峯に降ったとあるが、これを現代的に考察したら、どんなことになるだろうか。

高天原は天上の楽園ではなく、当時としては、最も文化の進んだ地であったとしたい。農耕が行われて水稲が栽培され、養蚕も行われて絹布も生産されていた。天照大神を主宰者として、秩序ある社会生活が営まれていた。この秩序を乱した須佐之男命は、高天原から追放された。

高天原は、次第に人口が増えて過密になった。そこで一部が移住することになった。その団長が瓊々杵尊であり、移住地が高千穂である。古代人は、高燥な高原台地に居を定めた。低湿地とちがい、水害・病害・虫害・獣害などが少なく、暮らしよいからである。高燥の地として、県北の高千穂も、県南の高千穂も適格である。

以上は私の貧しい考察であるが、これは砂上の楼閣である。相手が捉え所のない神話であるから。

しかし神話の里の人達が、長い年月にわたって、神話を生かし続けたことを尊いものと思う。県北の高千穂神社や、天岩戸神社の経営がそれであり、県南の高千穂では、霧島神宮の経営がそれである。私達が神話の里に郷愁を感ずるのは、そうした里人の心に感応するからであろう。